



極樂通信

ぶら

vol.
24



photo:Y. Hori

さて、またまた踊り子である。といってもこの写真はちょっと古いので、ピンときた方はかなりのファンである。そう、Gst Ayu Sri Yuliati。今でこそレゴンの踊り手として一世を風靡している（ほんとか？）ユリアティちゃんである。

1991年にムカール・サリでクリンチデビュー後、ティルタ・サリ、グヌン・サリと名だたるグループでチョンドンを踊ってきた彼女は数々のレゴン・ファン(?)を魅了してきた。

もともとチョンドンは初潮前ともいわれる少女の踊りだから、大きくなったら踊れなくなるわけで、旬の時期(変な言い方だが)は短いと思われる。

というわけではないだろうが、現在はなんと一家で「Yuliati House」というロスメンを営んでいる。オープン当初こそ水シャワーだったが、最近はホットシャワーもついて設備も格上げ中。泊まればもれなく毎日ユリアティちゃんに会えるという特典付き(?)で人気急上昇中である。

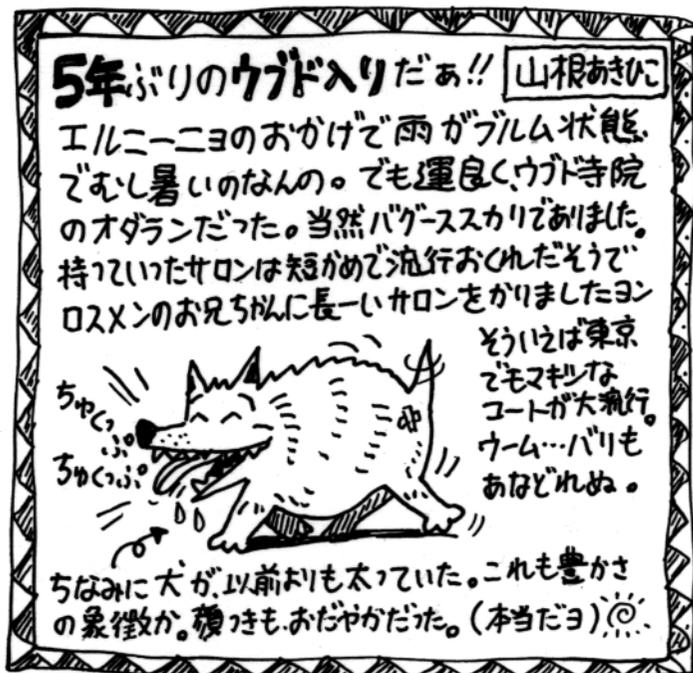
ユリアティちゃんが大きくなってチョンドンを踊らなくなってからもユリアティ・ハウスは未永く繁盛して欲しいものである。(ちなみに妹のビダニちゃんもめちゃくちゃかわいい。)

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama		● TOKO BEST 店	
チャロナラン in クタ -----	4	ULUWATU -----	22
JEGOG・ヌガラの海岸でムバルン -----	5	● Warung 味な店	
K・B (カー・ベア) -----	6	Kafe Batan Waru -----	22
バンジャール (Banjar) -----	9	● C・O・L・U・M・N	
● Perawatan Anak [5]		バリ恋愛症候群について - 最終回 - -----	23
正しい出産と育児 in Bali-5 -----	10	● Berita Terbaru	
● Belajar Tari&Gameran -15-		その他のニュース -----	24
私と踊りとガムランと / 15 -----	13	● Orang-orang Ubud/24	
● Bumbung Gebyog		うぶんな人々 / 24 -----	25
ブンブン・ゴビョグ -----	14	● O-Shi-Ra-Se	
● Pin-Pin-Boh/4		おしらせ -----	26
インドネシア語講座 / 4 -----	15	● Pengumuman	
● Bali Buku Catatan Harian/2		でんごんばん -----	26
バリ日記 [2] -----	16		

○表紙のことは○



編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、MacintoshによるDTP作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方でText Dataで入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

Macintosh formatまたはWindows formatのFD (Text Data)

E-Mail:

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

チャロナラン in クタ

小田蘭丸

クニンガンの日は、われわれ観光客にとって興味のそそられる行事が目白押しである。まずバリでは、近くの幾つかのバンジャールからバロンとランダの行列が街の中心である王宮付近に集まり、儀礼が繰り広げられる。そして、クルンクンのパクサバリという小さな村にあるプラでは、七台の神輿が、上半身裸の男たちに担がれ喧嘩神輿になる。デンパサールのレノン村のプラ・ダラムでは、珍しいパリス・チナという踊りが披露される。このどれにもクラウハン（トランス状態）する人が現われる。この他にもあちこちの村々で儀式が行なわれている。

今回の小田蘭丸は、友人にはこんな情報を流しておいて、本人は抜けがけしてクタのチャロナランを見に行くことにした。チャロナランの情報は、4日前の某新聞に載っていて、なんでも、入魂したばかりの新しいバロンで特別に行なわれるチャロナランだそう。クタはかなりサクティ（マジック・パワー）のある村だと聞き、これはきっと何かが起こるぞという予感がして、はるばるクタまで出掛けることにした。

「大きなお祭りだからジャラン・パンタイ・クタまで行けば、すぐにわかるよ。」と APA 情報センターのニョマン君に教えられ、なんの下調べもなしで出掛けたのが、大きな間違いであった。つまり、クタの街中へ行けばたくさんバリ人が正装して歩いているのだと UBUD 感覚で行ってみると、クタの街はネオン、キラキラのいつもの歓楽街。現地の人も観光客も、オダランのオの字も関係ない顔をして街を闊歩している。これでは誰に聞いても期待できる返事は返ってこないだろう。しかたないので、特技のオダランを臭ぎ分ける鼻を働かせ、プラの匂いのする方向に車を走らせることにした。一時間近くも走り回ったのだろうか、真っ暗な林の中に怪しげな明かりが見えた。ついに見つけた。よくよく考えて見れば、ここはかなり街中に近そう。あの歓楽街の喧騒のすぐ裏側に、まだ本来のバリが残っていたのか、と、びっくり。

会場に着いたのが夜9時30分、チャロナランはもうすでに始まり、バロン・ダンスは終わっていた。バロンを見ることができなかったのは残念である。会場はプラではなく、ラパガン（運動場）。そこには、竹で会場が作られ、5メートルもあるかと思われるティンゴ = Tingga（ランダが降りてくるやぐら）が立っている。人垣が多くて中の様子がよく見えない。ここは観光地の真ん中なのに、外国人の顔は10人もいない。情報がなかったのか、それとも、クタを訪れる観光客はバリの芸能には興味がないのか。やっぱりそうだったかと再認識してしまう。ワルンは1件もなく、タバコ屋とお菓子屋の2件が小さな店を出していた。もうこの風景に入ると、いつものバリのオダランの雰囲気である。

チャロナラン通を自称する小田蘭丸は、芸能の始まりと楽屋裏を見て今夜の出し物は4時間公演と見積もり、2時間ほどを経過したところでよく見える位置を確保するために、少しずつ観客を押し分けて中に入って行く。ティンゴの横の正装した男性ばかりの一团の中に混じり座る込むことができた。もちろん小田蘭丸は完璧なまでの正装スタイル、村人は心良く座る場所を開けてくれる。

チャロナランの内容は UBUD 周辺で見るとほぼ同じだが、演者がすべて初めて見る人ばかりで新鮮。寸劇の部分でバリヤン（呪医師）を呼ぶ場面では携帯無線電話を取り出し、日本人が電話口に出たという設定で、「もしもし、はいはい、ダバダバダバダ、?????????」と、何やらわけのわからない日本語だが雰囲気を手上に模写して面白。また、バンジー・ジャンプの話などクタらしい話題が出ていた。

いよいよクライマックスのランダの登場。ティンゴからランダが降り始めると、いきなり前に座っていた男性が大声を張り上げ幕に向かって疾走した。勢いあまって幕の中で転んでいる。小田蘭丸の周りに座っていた20人くらいの一团の中の誰かがランダの叫び声をあげている。泣いているようにも聞こえる。どうもこの一团はクラウハン要員かもしれない、と思った瞬間、右隣の男性が疾走した。プマंक（お坊さん）が一团に上着を脱ぐように命じ、全員が上半身裸になる。やはり、この一团はクラウハン要員だった。たいへんなところへ座ってしまったと気づいたがもう遅い。一团の前に、もうもうと煙の立ちこめる線香が置かれ、不思議な香りのする線香の煙は一团の方に流れてくる。プマंकから聖水を降り掛けてもらうと、近くで座っている小田蘭丸も今にもクラウハンしそうな気分になる。

2体のランダが叫び声をあげながら中央に歩み寄る。ランダが叫び声をあげるたびに、クラウハンした人々もあたかも一体化しているかのように同時に叫び声をあげる。立ち上がり、走りだそうとする人をプマंसがさとすように座らせる。一团のほとんどがクラウハン状態。

ランダがクブラン（墓場）に行った。

10数分経ったころランダがクブランから戻って来た。と同時に人々のクラウハンが激しくなる。プマंकの「立ち上がってもよい」という言葉と同時に、全員がランダに向かって疾走した。他の観客も立ち上がり場内は騒然とする。中央ではランダに向かって、クラウハンした人々がクリスを持って暴れまわっている。30分以上もクラウハンは続き、終演は深夜の1時30分。

あんなに俗化されたクタにも、まだ、クラウハンする男たちがいる。これはバリの男たちの魂はまだまだ俗化されていない証拠。そして、クタにもまだバリらしさがちゃんと残っているのに安心した、今回の小田蘭丸の「チャロナラン in クタ」でした。

JEGOG・ヌガラでムバルン（競演）

UBUDにある居酒屋「影武者」のマネージャー・伊藤氏は、JEGOGの音を聴くと荒れ狂う大海原に漂う自分を感じると言う。伊藤氏はその怒涛のように押し寄せる荒波の音を想像させるJEGOGの音と浜辺に打ち寄せる波の音を実際に競演させたいという夢を持っていた。そんな夢を（財）スアール・アグンのスウェントラ、和子夫妻に打ち明けると、「それは面白い、ヌガラの海岸でムバルンをしよう。」ということで話はとんとん拍子でまとまった。伊藤氏は、もう一つ贅沢な注文をした。それは、ムバルンを3チームですることである。なんと大胆な企画であろうか。主催はAPA情報センター。企画がまとまったのは1997年の夏のことである。

そんな伊藤氏の夢物語は、人から人へ伝わって、いつのまにやら海を渡って日本のJEGOGファンにまで伝わり、ぜひ参加したいという声があがり、異常な盛り上がりを見せた。多数の問い合わせや、ツアーを出そうという旅行会社まで出たそうだ。

夢の3チーム対抗ムバルンは1997年12月28日に実行された。UBUDからの参加者は70人ほどで、大挙観光バス3台をつらねての出発。観光バスはランブット・スウィで小休止をし、参加者はムスポ（お祈り）をさせてもらう。なんと70人もの人である。ランブット・スウィ寺院を過ぎて30分程、走りMendaya村を左折したPantai Delodberawah（デロブラワ海岸）が今日の会場である。海岸は砂浜が幅30m、長さは遠く彼方に霞んで見えないほど果てしなく長い。会場の海岸には、もうすでにガムランのメンバーが到着している。現地へ直接参加した30人を足して、参加者は100名という大盛況。村人たちの見物人を加えると、なんと総勢200名以上の人々が海岸に集まっている。前日の大雨、そして前々日、三日前と雨模様が続く、関係者を心配させた（伊藤氏は雨は降らない

と確信していて、いっこうに心配していなかったようす）が、当日はうって変わって快晴。JEGOG日和りがあるとすればこんな日のことを言うのであろう。JEGOGの楽器のセッティングが始まった。海岸の砂浜は今、幅30mあるが、あとで潮が満ちてくると砂浜はほとんど隠れてしまうようで、土の部分にもっとも近い砂浜に海を背にしてセッティングすることにした。参加者は海に向かって土の部分に坐り込む。

午後4時、開演。JEGOGの音の波と波の音との競演がいよいよ始まった。大海原を背にして並んだJEGOG／3チームは、大自然のロケーションにも決して見劣がせず、一枚のバリ絵画になるほどマッチしている。演奏者は「音が砂に吸い取られてしまい返ってこない。そして、波の音に敗けてしまいそうなので、いつもの数倍のパワーで叩いたので、今日はとても疲れた」と公演後の感想を述べていた。しかし、参加者はそんなことにおかまいなしに、JEGOGの演奏に興奮状態。伊藤氏も波打ち際とJEGOGの間で満足気な顔で聴いている。

西の海に沈む太陽が茜色に染めた空をバックにJEGOGは終演に近づいた。バリ舞踊が披露されたあと、スウェントラ氏の指導で踊りのレッスンがあり、ジョゲブンブンで参加者の数名が踊った。演奏後は楽器に触れることもでき、グループのメンバーから手ほどきをうけていた参加者もいた。

参加者の顔つきは全員がJEGOGを満喫したといわんばかりである。そして、名残惜しそうに帰路についた。

後日談：スウェントラ氏曰く、「海岸には、赤い髪をした何者かが100人ほど走り廻ってサッカーをしていて、たまに演奏しているわれわれのところきては、いたずらで脇をくすぐっていくので演奏しずらかった。」…なんて不思議なことを言っていた。なんでもこの何者かたちは、20cmほど地面から浮いたところをすべるように歩いているそうだ。スウェントラ氏は不思議なパワーをもった人。そんなものが見えてしまうのですね。えっ、あなたも見たって？

とにかく、ふだんではお目にかかれぬ、すごい企画でした。この企画の成功に気をよくした関係者は、年末の恒例行事にしようと意気込んでいました。



特派員報告 K・B (カー・ベ)



K・B、インドネシア語読みでカー・ベ。これはいったい何のことかといいますが、「Keluarga Berencana」(クルアルガ・ブルンチャナ)の略で、「家族計画」という意味です。「家族計画」といっても、「家族で旅行したりピクニックしたりする計画をたてること」ではありません。K・Bは、インドネシア政府が奨励している産児制限政策のことです。でもって、インドネシア一般市民の間では、もっぱらKB=イコール=避妊、もしくはそのための方法、ととらえられているようです。

インドネシアはついこの間、人口がついに2億人を突破しました。2億人を越えた最初の一人目の赤ちゃんは、ロンボクで生まれたそうです。政府に正式に出生登録しているだけでこの人口、ということは、きっと実際にはもう少し多いのではないのでしょうか。そして、インドネシア全体の人口密度が高くなってきているのも問題になっている。特にジャワ島やバリ島などは、政府が「Transmigrasi」(移民)を奨励しているほどです。実際、バリ島内の貧しい村々からスラウェシ島などに、新天地を求めて移民していくバリ人たちがいます。

さて、第二次世界大戦の戦中、戦後までに子供時代を過ごしたバリの人たちは、結婚して、た〜くさんの子供をつくりました。その頃、避妊に関する知識も、

道具もなかったのはあたりまえ。インドネシアも独立したてのホヤホヤで、人口のことまでとても気にしていられなかったのでしょうか。5人、6人の子供はざらで10人以上の子供を持つ母親もいました。そして、その子供たちが今では立派な大人になり、結婚する年令になりました。ところが現在、若い夫婦の間で5人、6人も子供をつくらうとするカップルはほとんどいなくなりました。そうです、例のK・Bで、「Dua Anak Cukup」(ドゥア・アナック・チュクップ=子供は二人で充分)という標語がつくられたのです。若いカップルが子供をたくさんつくりたくないのは、K・Bのせいばかりではありません。子供用の服、おもちゃ、病気になった時の医療費、予防注射、そして幼稚園、小学校から高校、大学、専門学校までの学費、やがては結婚式。昔とは比べものにならないほど生活水準が急上昇している今、子供をひとり持つとたいへんな額のお金が必要になる時代になってしまいました。ちなみに、デンパサールの小児科に風邪で一度かかると診察代が15,000ルピア、鼻みず止めや、咳止め、解熱剤などフルコースの薬代が3〜4万ルピア。デパートでちょっとTシャツとズボン(1歳用)を買って3万ルピア、乗って遊べるプラスチックの車が3万ルピア。数回繰り返して受けなきゃいけない予防注射が1回2〜3万ルピア。日本ではいづれも無料で受けられるものが、こちらでは有料なのです。そのかわり、政府援助によるPuskesmas(保健所)での予防接種はいくぶん安くなります。また、これは裕福な家庭のご子息、ご令嬢が通う私立名門校の学費が月に3〜4万ルピア、コンピューターなどのハイクラスレベルの専門学校の学費が月約7万ルピア。ちょっと驚いてしまう額でしょ?逆に、観光客産業もないような田舎の貧しい家庭では、両親の手伝いで田んぼや畑の仕事をし、収穫時期になると忙しくて学校に行けないような小学生もいたりするのです。全インドネシアで定められている公立学校の通学のための制服(小学校はえんじ色、中学校は紺色、高校はグレー)を一着揃えるのが精一杯で、靴が買えずゴムソウリで通学する子供たちもまだ多勢いるそうです。



■村を歩くとあちこちで見かける「BIDAN」の看板。これは助産婦さん(昔の産婆さんですね)の意。たいていKBも受付中。

UBUD 郊外、T 村に住む A 氏は今 35 歳で公務員。近くの村の学校の先生たちのお給料を計算したり管理したりする重要なお仕事をしています。今でこそ、月に 30 万ルピア近いお給料をもらい、サイドビジネスに養鶏場を持ち、2 人の子供にも恵まれて、ますます不自由のない生活をしている A 氏にも、こんな苦労話があります。

小さい時にお父さんを亡くした彼は、小学校を卒業すると、まだ幼い弟や妹のためにデンパサールのチャイニーズの経営する商店に住み込みで働くようになりました。まる一日、使いっぱりのような仕事をして、何ヶ月がたつと、やっと少しのお金がもらえ、それを実家の生活費のためにお母さんに渡し、更に働いて数か月。約 1 年ほどで彼は、やっと自分が中学校で勉強するための学費と通学のための服、そして、教科書を手に入れたのでした。学校の成績が優秀だった彼は、高校の学費は奨学金で補助され、人のつてもあって運良く公務員になれたのでした。そんな辛い経験をしている人ほど、自分の子供にはカワイイ服やいい学校を、と思うのは日本と同じかもしれません。そんな理由で、「子供はたくさん産んだらたいへん、2 人で充分」という気持ちもあるのでしょう。それでも、男子が家系を継いでいくここバリでは、3 人姉妹のあととは何があるんでも男の子を、と、頑張って 4 人目をつくるカップルもいます。「ねえねえ、男の子をつくる方法ってさ、日本にも何かあるでしょ。教えてよ。えっ？バリでは？ウフフ、そうねえ、アノ時、男性側が Semangat (一生懸命) だと男の子、女が一生懸命だと女の子って言う人もいるけど…いやあねえ (笑)」なんて変な相談をしに来る若い奥様もいたりします。運悪く(?) 4 人目も、またまた 5 人目も女の子だった場合、奥さんの年令や家の経済状態から、多くの場合あきらめますが、その場合は Sentana (スタノ=婿養子) をもらう、Nyentanin (ニェンタニン) という制度があります。その場合、ふつう長女が Sentana を探すのが習わしですが、「おねーちゃんが、ちゃっかり駆け落ち婚で嫁に行っちゃったので、私がスタノ探さなきゃなんないのよ。今時スタノになってくれる人ってあまりいないのよ、お金持ちで美人ならいいけどさ、私なんてどうしよう」なんていう、たいへんな立場になっている M ちゃんみたいな女の子も最近が多いようです。

さて、これからする話は日頃品行方正な「極通」からはちょっと横道にそれますが。

●ジャン・ジャ・ジャー、避妊の話です!!

K・B は、インドネシア人にとって「避妊」を意味する言葉でもある、というのは先に書きましたね。今、バリの女性たちは、結婚して子供を産むとすぐその場で、産婦

人科の先生、もしくは助産婦さんから、「ほんじゃあ、1 ヶ月後に K・B に来てね」と命令されます。産後 1 ヶ月目から避妊しなければいけないなんて、オサカンですこと、と感心してしまった「極通」スタッフ。ここで、どんな避妊方法が取られているのか、更に詳しく調べてみました。ちょっと専門用語が入りますが、わからない人は百科事典などで調べてください。

まず、普通分娩で子宮口の広さがそれなりに開いている人は、I・U・D という器具を子宮に入れて受精卵の着床を防ぐ方法がとられます。(極通スタッフの身近なバリ人の中では、この器具のことをズバリ、カー・ベーと呼んでいる人が多い。) Puskesmas や村の助産婦さんで費用が約 5 万ルピア (7 年間使えるそうです)。極通スタッフがずーっと以前に泊まったことのあるホームステイ・P のお母さんは、こう言っでは失礼かもしれませんが、超ド級肥満型のもうとくに 40 を越えたオバハンでしたが、ちょうど家のオダランの時にそんな話になって、「ウチはね今でもカー・ベーしとるんやけど、最近ちょっと調子が悪くて、変な時に生理になるんよー」と言うのを聞いた時は、「…ふうん…」と、ちょっと絶句してしまったことがあります。笑話ですが、それこそ 10 人も産んでしまったお母さん



■バリのあちこちで見かけるキャンペーンの石像。

などは、川で洗濯をしたあと、重いバケツを頭にのせた途端に、入っていたカー・ペーがずれて、それを知らずにまた妊娠してしまったなんていう話も聞いたことがあります。

次は、ホルモンに作用する注射をすることによって、卵子をつくる機能を妨げる方法。これは帝王切開の分娩後など、子宮口が狭くてI・U・Dが子宮に入らない人向き。1回接種で5,000ルピア。1ヵ月ごとに接種するものと、3ヵ月ごとに接種するものがあり、生理が不順になるのが玉に傷。今どきの若い経産婦に人気が高く、普通分娩をした人でも、この方法を希望する人がいるそうです。白い液体を細い注射器でプッ、って感じで全然痛くないのですが、しかし、一度生理がくると少量の出血が毎日毎日2ヵ月続くという人もいて、毎日のお供え物ができない嫁に、「あんた、嘘ついてんじゃないでしょうね。」と嫌味を言う姑もいるとかで、問題になっている注射でもあります。

さて次は、経口避妊薬・ピル。これは「毎日1錠飲む」という方法がなかなか遂行できずに不人気。我々日本人は、ピルの1錠や2錠、水でゴクゴク簡単に飲み込めますが、バリの人々はこれが出来ず、どんな薬でもバナナと一緒に口に押し込んでイッキに飲み下す、という方法をとるためあって、ピルは苦手とされているようです。それに、母乳が出なくなることもあるとかで、授乳中のお母さんには使えません。

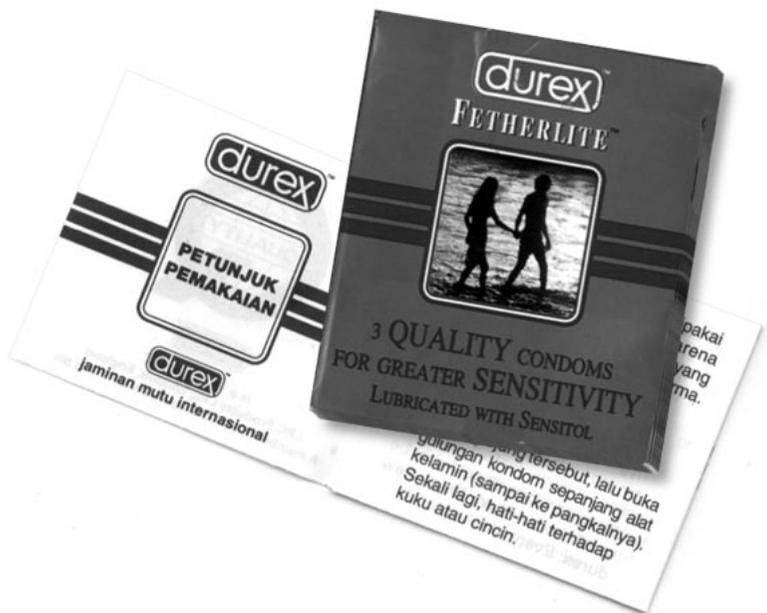
最後にキワメツキ、コンドーム。未だに開発されていない、プリミティブの住む地域が残っているインドネシアですが、そんな医療器具や設備が整っていない地域に無料で配布されているコンドームです。3個入り、お手軽パック500ルピアのインドネシア製コンドームのパッケージには、「2人で充分」という意味のVサインの手が描かれていたりして大笑い。「シルクのように滑らかで、自然な使い心地」なんていう、コピーで売られていたりします。最近、街のスーパーや薬局で、イギリスDurex社の高級品を売り出すようになり（「へーえ、詳しいなあ」と感心しないでね。このためにあえて調べたんだから）、12ヶ入り8,500ルピア。そもそも、バリの男性たちはこの方法にあまり馴染みがなく、使ってみたものの、付け方が悪くて破れた、とかタイミングが悪かった、とかの失敗談をよく（でもないか）聞きます。だから、ほかの方法に比べて人気はグーンと

落ちます。よくある話ですが、イリアン・ジャヤの方では、子供たちが水を入れてオモチャとして楽しんでいるというのも聞いたことがあります。

さて、UBUD近郊のL村のあるバンジャールに行く。バンジャールの地図に細かく1戸1世帯まで名前が書き込まれているパネルが壁に掲示してあります。そして、なんとそれには1世帯ごとに、名前の下に何のK・Bを使っているかが書き込まれているのであります。まあ、「このバンジャールは、みんなでK・Bをちゃんとして、政府の方針どおり活動しています」みたいな意味あいなのでしょう。それにしても、「あっ、隣のWさんは注射なのね」とか、「おっ、向かいのNさんはコンドームかえ」とか言われるのも、とても恥ずかしいと思うのですが、当の住人たちはいったいどうなんでしょうね。

それにしても、ここバリでは村や家々のブラ、そして数々の儀礼などちゃんと昔どおりに守って受け継いでいくには、1戸あたりに相当の人手が必要です。それが、K・B政策がこんなに普及してしまった今、果たして、「2人で充分」なのでしょうか。その2人が二人ともヌサドゥアのホテルに勤めて、ガルンガンもニューピもなく仕事をしなくてはならないとしたら…？何だか深刻な問題にもなりかねません。

今回は、ちょっとエッチで、ちょっとマジなK・Bの報告でした～。



特派員報告 バンジャール (Banjar)

バリ関係の雑誌やガイド・ブックに出てくる言葉に「バンジャール」があるが、一体何のことだろうか？ と思ったことはありませんか？ この「バンジャール」も、「カスト」と同じように、われわれ外国人にはわかりにくいコトの一つである。しかし、この「バンジャール」は、バリの宗教・芸能・慣習に複雑に絡み合い、バリ人の生活の骨格にもなっている。「バンジャール」を理解することによって、バリ人の宗教・芸能・慣習に対する考え方が見えてくる。

今回はこの「バンジャール」を少し調べてみた。

バンジャールはもっとも小さい村組織のことである。そして、いくつかのバンジャールが集まってデサ・アダットと呼ばれる慣習村ができていく。アダットとは、しきたり、ならわし、地域の独特な伝統といった意味だ。だから、各バンジャール、各デサ(村)ごとに、それぞれアダットが違っているわけだ。

通常、バンジャールの入口には、外部からの侵入者をチェックするための見張り小屋(ポス・カムリン)が道路脇に建っている。インドネシアはギャンブル禁止なのだが、よくこの小屋でギャンブルに興じている村人を見かける。

村人は交替で村やブラを警備をする。特に、ブラにある儀礼のための大切な品物が盗まれないように気を配っている。もし不審な人物でもいたら、クルクルで警報の合図を打ちならしバンジャール中に知らせるのである。

バンジャール内の事件やもめごとはバンジャールの慣習のもとで解決していく。バンジャールは、警察や裁判所の役割もします。そういう意味では独立自治区であり、小さな王国と考えてもよいかもしれない。あるバンジャール内での出来事で、こんな話を聞いたことがある。少年がよその家からミニ・コンボを盗んだことが発覚。どう処分するかバンジャールの集会で論議された結果、警察には通報せず、少年はバンジャールの男たちの前で、二度としないことを誓い、事件は解決したようだ。また例えば、バンジャールで泥棒が出たとして、それが、バンジャール以外の見知らぬ人間ならば、悪くすれば袋叩きにされる可能性もある。恐い話だが、それで、死んでしまったとしても誰も責任をとがめられないのだ。

結婚についても、バンジャールの人々の承諾が必要である。こんな話を聞いた。あるバンジャールで未婚の女性が妊娠した。相手の男性は他のバンジャールの人間で、どうも結婚についての返事がはっきりしない。そこで女性の方のバンジャールから結婚の承諾を相手のバンジャールへもって行く。これは女性側のバンジャールの面目を掛けての大切なことで、必ず結婚にもっていくとする。そして、バンジャールどうしの喧嘩になってしまうこともあると聞く。バンジャールのほとんどは親族集団が信徒集団と言ってもよい。そのために、結束が堅いのもうなずけるというもの。こんなふうにして、村の

結束を固め、村を守っているというわけなのだ。

それでは、バンジャールのメンバー構成はどうなっているのだろうか？

K・K(カー・カー) = Kepada Keluarga(家長)と呼ばれる、最も重要なメンバーは男子が結婚し、夫婦を単位として初めて正式のメンバーになれるとされている。だから、バリ人は必ず結婚しなければならないと考えている。これは、神々への供物を作る女性がいないとバリ人としての社会生活ができないという理由からである。集会には男性だけが出席する。K・Kの権利は父親から息子夫婦に受け継がれていく。また、バンジャールの家長メンバー以外にも、そのバンジャールに住んでいる主婦たちの組織、P・K・K(パー・カー・カー)、未婚の青年と未婚女子の組織である青年団・Pemuda Pemudi(プムダ・プムディ)や、ガムラン・グループ・Sekeha Gong(スコ・ゴン)、田植えや収穫、田んぼの水利を管理する組織・Sekeha Subak(スコ・サブク)などがある。

そして、バンジャールの役割は？

まず、ブラの維持、管理、そして、オダランの運営、労力提供などの義務。これらブラに対する奉仕のことを(ン)ガヤと言う。さらに、バンジャールの集会場や道路などの公共施設の建築、維持、管理、そして、バンジャール内の家族の儀礼、葬儀、火葬式などの労力提供など。これらの相互扶助をゴトンロヨンと呼んでいる。

相互扶助はカストや貧富に関係なく平等に役目を負うことになっている。

この相互扶助という制度がバンジャールの人々の重要な役割であり、バリ人の社会生活の基盤でもあるのだ。日頃バンジャールのゴトンロヨンに参加していないと、いざ自分の家で結婚式、成人式、子供の誕生日などの儀礼の時、他のメンバーの扶助が得られないことがある。儀礼のための準備や供物作りは何日間もかかり、バンジャールの大勢の人々の協力がなくてはできないのだ。もし、扶助が受けられなかったら、バリ人がもっとも大切とする「清め」の儀礼である葬儀や火葬が出来なくなってしまふ。バリ人の宗教観である「輪廻」(火葬された霊は浄化され、祖霊神となって帰ってくる)が実現されなくなってしまふ恐れがある。こんな結果をもっとも畏れているバリ人は、必ずゴトンロヨンに参加するというわけなのである。

ゴトンロヨンを怠った家の墓が掘り起こされ、死体が移動されたという話や、火葬式の当日、死体を火葬場まで運ぶパデと呼ばれる神輿が投げ捨てられたという恐ろしい話も聞いたことがあるほどだ。

このバンジャールという組織があることによって、村人の結束が固くひとつにまとまるのである。このまとまりが、バリの平和で穏やかな日々を育てているのだ。そして、われわれ外国人も、その恩恵にあずかって、治安の良い、安心できるバリ滞在が過ごせるのである。

正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 5

■第5弾「恐怖のオペラシ・パートII」

手術室でスタッフのおしゃべりを聞きながら待つこと15分。突然、バタバタとスリッパの音が聞こえてきたかと思うと、ドクトル・Sが駆け込んできた。彼はスタッフと二言、三言バリ語で会話したと思ったら、唐突に「さあ、はじめよう。」と言った。いつものあのニヤけたドクトル・Sの顔ではなく、なんだか疲れているような不機嫌な面持ちである。「遅れてすまなかったね、気分はどうだい？ ワッハッハッ」といつもの調子で言ってくれればこちらも安心して寝そべっているのに、私の顔を見ようとしめない。よく見るとドクトル・Sの目は真赤に充血している。ただでさえ検診で忙しいに、お産というのは昼夜かまわずやってくる。おそらくあちこちの病院を駆け廻っていたのだろう。そんな状態で私のハラはちゃんと切ってもらえるのだろうか。考えれば考えるほど不安になってくるので、ただひたすら上のまぶしいライトを睨みつけ、血圧係の兄ちゃんの「フカフカフカ、シュー」を聞きながら心の平静を保つよう努めた。スタッフたちは相変わらず無駄口を叩いている。「あっ、おまえ、逃げるのか」「いんや、この最初に切るところは、なるべく見たくないんだよ。」だまれだまれ、ハラを切られている身にもなってみよってんだ。それからはさすがにスタッフも無口になり、気味が悪いほど手術室はシーンとしている。ドクトル・Sがメスか何かを金属製のトレイにカチャカチャと置く音だけが響く。ああ、恐い。こんな恐怖は今まで味わったことがない。…と先生が何かバリ語で言った。

すると突然、スタッフのひとりがBabyを両手で抱えて私に見えるように枕元まで持ってきてくれたのである。「無事誕生です。男の子ですよ。」 あっ、そうか、

そうだったんだ、Babyをとり出すための手術をしていたんだ。「ハラを切られる」ことばかりに意識が集中していて、私は正直言ってBabyのことを忘れていたのであった。

いきなり外界(?)にひっぱり出されてビックリしているのか、私のBabyはもによもによと手足を少しずつ動かしながら目をパッチリと開けていた。私の中で初めて大きな感動が沸き起こった。ああ、生まれたのねえ。そんなにパッチリおめめを開け…。涙が頬をつたう。血圧係がタオルで涙を拭いてくれる。Babyは産湯を使うために別室に持っていかれた。手術室を出たあたりでBabyがやっと大きな声で泣きはじめたのを聞きながら、私は喜びと感動と幸せで満ち満ちた気分だった。壁の時計を見ると午後11時少し前。そういえば、今日は8月16日である。ということは、Babyの誕生日は8月16日なのね、と思っていたら、スタッフのひとりが言った。「あと1時間手術が遅ければ8月17日生まれだったのにねえ、残念だったねえ。」8月17日はインドネシア独立記念日である。「8月17日生まれの子は政府からお祝いが出るし、何といっても大きくなってから学費援助が受けられるからなあ…」ええーっ!!そんなこと今さら言わないでよ、それホントなの?!「えっ、知らなかった? あっ、じゃあ書類は8月17日ってしとくよ。なーに大丈夫、ビサ、ビサ、ティダ・アパ・アパ〜。」でも、出生からして真実をゆがめて書類を作ってもらってはどうも縁起が悪い。「偽造された出生」をこの子がこれから一生背負っていくか考えると、いくら学費が免除されるからといって、めでたしめでたしではすまされぬ。「いえ、書類はちゃんと今日の日付けで作ってください。」と私がキッパリ

と言うと、出生書類の偽造をすすめてくれたそのスタッフは、「オー、ヤ？」とちょっと意外な顔をしたのであった。そして、まだ向こうの部屋でおぎゃーおぎゃーと泣いているわが息子の声を聞きながら、再び私は幸せに浸っていた。…のも束の間、今度は私のお腹のあたりから異様な音がしはじめた。「じゅるじゅるじゅるじゅるガーツ、ずるずるずるずるゴーツ」まるで日本の汲み取り式便所からバキューム・カーのホースで汚物を吸い上げるような大音響である。事前に本で読んでいたのでわかったのだが、Babyをとり出したあとの私の子宮の中の掃除をしているのであった。ああ目隠しの板があつてよかった。そんなありさまを自分で見てしまった日には一生悪夢となって思い出すに違いない。そのなんとも言えない音を聞きながら、なんとも言えない気分になっていたその時である。なんだか意識の遠くの方から、何かずっしりと鈍くて重いような、ヘンな感触が近付いてくるのに気が付いた。「あれ？

これ、何？」と思ったが早いか、次の瞬間には今まで味わったことのない感覚が突然襲ってきた。「痛い」なんていう言葉では足りないほどの、超ウルトラ・ヘビー級激痛であった。要するに麻酔がいきなり切れたのである。「そんなことあるわけない。」と思うだろうが、本当に切れたのだ。あまりの痛さと衝撃にパニックに陥りそうになるのを必死に耐えて、私は、「い…、いたい…、ドクトル痛いよ！！」と力をふり絞りながらインドネシア語で言った。もうすでに目の前は真暗である。激痛に耐え切れず、おそらく半分気を失ったのだと思う。少し暴れた…ような気もする。下腹部を盛大に切り開いて、子宮の中をバキューム・ホースで掃除しているのを、まともに神経に感じたらどんな具合か想像してみしてほしい。

ドクトル・Sが「あっ！！ おお、今吸入麻酔を…早く！！」と言ったのと、スタッフが何か声を張り上げてバタバタしているのを遠くの方で聞いているように思いながら、そのまま私は意識がなくなった。

ほんやりと目が覚めた時は、すでに病室であった。「おっ、気がついたぞ」と、家族や親族がかわるがわる、私の顔を覗き込んでいる。下腹部はまだ麻酔が少し効いているのだろう、鈍い痛みがある。「あれ、私ってどうしたんだっけ」…と改めて思い出してみる。そうだ、赤ちゃんは！？時は、どうも真夜中のようだ。「ホラ、そこのベビーベッドで寝ているよ。」と、Dが優しく答え

てくれる。まだ自由に動かない頭を少し横に向けると、白いレースの蚊帳を掛けられた小さなベビー・ベッドがすぐ横に置いてあるのが見えた。しかし、起き上がって覗く力はない。まだ意識がもうろうとしていて、そのまま目をつむると再び私は眠りに落ちてしまった。

次に、目が覚めたのは早朝である。Babyが泣いていて、お義母さんが抱いてあやしている。おそらく徹夜で子供の面倒をみてくれたに違いない。お義母さんの髪は乱れてボサボサ、目は真赤で半分まぶたが下がっている。向こうのベッドには、Dが倒れ伏したように寝ている。「ああ、目が覚めた？ ホラホラ泣いてるから、ちょっとおっぱいあげてみる？ピサ？」本当はまだ、このまま眠ってしまいたいほど頭がクラクラしていたのだが、私は母になったのだ、と思い直して、必死に言った。「ビ…ピサ、ピサ！」ちょうどやってきた看護婦さんに助けってもらってベッドの上で上半身をやっとの思いで起こす。「あれれ？」なんと私はすっ裸で、下半身に一枚と上半身に一枚、それぞれパティックの kain が適当にくしゃくしゃと掛けられていただけなのであった。手術後の着替えのフォローは、この病院ではしてくれないのだろうか？なんだか戦場から帰還した負傷兵のように惨めな姿である。気を取り直して髪をまとめ直し、お腹から下に毛布を掛けて、わが子を両腕に抱く。首がすわっていない赤ん坊というものを、生まれてこのかた抱いたことがない。おっかなびっくりで抱いて、おっぱいをあげるが生まれたばかりの赤ちゃんは、まだよくわからなくてうまくおっぱいに吸いつけならしい。まして、こわごわ抱いているのが

わかるのだろう、抱かれ心地が悪かったのか、さらに泣きはじめた。「あらあら、じゃあ、ミルクをあげましょうね」と看護婦が缶ミルクをミルクびんに入れている。私は上半身を起こしてはられないくらいの下腹部の痛みを耐えながら、Babyがミルクをんぐんぐと飲んでいるのを見ることしかできなかった。

日本の育児書によると、出産後すぐにおっぱいが順調に出る人はまれで、赤ちゃんが次第におっぱいを吸うようになると、それが原動力となって母乳が中でどんどん作られていくのだそうだ。だから、のっけから生まれたばかりの赤ちゃんにミルクびんでゴクゴク飲むクセを付けると、お母さんのおっぱいをがんばって吸う力がい



Illust:Fumio



Illustr: Fumio

つまでたっても強くならず、したがって母乳の出も、ずっとかんばしくないままなのだそうだ。私の場合まさにその悪循環に陥ったのだった。

日本の産院では、出ようが出まいが、とにかく赤ちゃんにおっぱいを吸わせるというシステムをとる。それでもある期間内で赤ちゃんの体重が増えなかったら、そこではじめて母乳不足としてミルクが補われるのである。あとで聞いてわかったのだが、バリでは病院やドクトルによってやり方がまちまちらしい。この私の選んだ病院では、母乳が出る身体の仕組みを完全に無視して、初日からミルクをたっぷりと与えたのである。おかげで「母乳不足の母」という、私に貼られたレッテルはこのあとずーっと、私の精神的安定をゆさぶり続けることになる。

病院に対しての不満は、そればかりではなかった。昨夜ハラを切開したばかりだというのに、「トイレ？ おしっこは管が入ってるから大丈夫でしょ？ えっ？

○ン○？ 気を付けてベッドから降りてくださいね。ゆっくりとね。」あろうことか、起きて立って歩いて自分でトイレに行けと言っているのである。もう一度言うが、昨夜ハラを切っているのだぞ。そういえば手術の前に、私はイカン・パンガンを食べてしまったのだ。それもお腹いっぱい。私は今更になって後悔した。やめときゃよかった。まさかこんな試練が待ち受けていようとは。この病院のベッドときたら、幅は狭く、自由に寝返りもうてないほどなのである。それにこの高さ！！再三

言うが、昨夜ハラを切開した患者が足を降ろそうとしても届かない、ということは、ぴよんと飛び降りろということなのか？！見かねたDがイスを持ってきて、私の肩を支えて降ろしてくれた。それだけで地獄の痛さである。更に歩いてトイレに行って便器にしゃがまねばならぬのだ。いやおうなしに襲ってくる排泄の本能を、この時ほど恨めしく思ったことはない。同時に、この病院の冷たさを思い知った。ゴネればベッドの上で始末してくれるだろうが、それも考えてみるとイヤなものである。その時、便秘でなくスムーズに出たということだけが唯一の救いであった。このうえ力まねばならないとしたら、あまりのハラの痛さに私は便器の上で失神していただろう。

定期的に痛み止めを射ってくれるのだが、あまり効かず、検診に廻ってきたドクトルまでが、こう言い放ったのだった。「痛いって？ そりゃあ痛いさ。明日からベッドから降りて少しずつジャラン・ジャランしてごらん。そのうち痛みも和らぐだろう。」ジ、ジャラン・ジャランだってえ?! くだいようだが昨夜私はハラを………なんだか悲しくなってきた。痛みと怒りのぶつける場所をなくした私は、ただひたすら悲しかった。でも、そばで眠っている小さなわが息子を見ると、そんな悲しみや辛さもいっぺんにふっとぶのだった。テレビでは朝からジャカルタの独立記念式典を生中継で放映している。インドネシア独立51周年の前夜、生まれたこの子は、《ワヤン・アディ・ウィラバワ》と名付けられた。(つづく)

あかばな一・ひかる



初めての一人旅。初めてのバリ。ドキドキとワクワクがいったいどの夢の島、バリ。…。あれも見たい。これも見たい。そうそう、なんたって芸~術の国なのですから踊りも習ってみたい。そんな軽いイカレポンチキの私が一人 UBUD へやって来て踊りを習うことになった。バリの伝統に少しでも触れることで、この国をのぞいてみたい。そんな軽い気持ちだった。

私は英語もインドネシア語も全くできない。“アグン”というポーズをとらせてアユは言う。

アユ「なま。あぐん。」

私「???? (北を指さし) あ〜! まうんと!」

アユ「ていっだーっ!!」

(この時、本気で怒っていた)

一緒に偶然習い始めた MIKI ちゃんも、

アユ「なま。あぐん。」

MIKI「なま! MIKI ~~~!」

アユ「……………」

(名前を聞かれたと思ったらしい)

そして第一回目の練習が終わり、

アユ「べそ。さまさま。」

私 (なんだかわからないけど)「や〜。や〜。」

急いで帰り、辞書で「べ…、べそ…、さま…さま。ん? あす。同じ? え? ひょっとして…毎日やんのお〜?」

言葉ができない。大変だけれどおもしろい。言えるのは「カキ(足)るばー(忘れた)」毎日「るばーるばー」そして「頭がるさー!」

夢の様な観光旅行がふっとんで、(ライステラスも見えない) ひざ痛い、ふともも痛い、肩痛い、そんな三日間が過ぎ、四日目。心臓が痛い…。あわれ、私は異国の地で死ぬのか? 五日目。ふっと、長年わずらっていた腰痛がうそのように消える。仕事で痛めていた背中の中の痛みも消える。あれ? なんだか不思議〜。

アユ先生宅へ引っ越してから、練習は朝9時になり、私は急に動いて死んではいけないと、2時間前に起きる。すると「べそ、8時。」と言われる。そして次の日から6時にマンディーする生活を続けると、ある日アユが「おまえはいつも何時に起きるのだ?」と聞いてくるので、6時だ。と伝えると、「それはいい! あすから毎日7時に練習。」と言った。ええ〜! そんなあ〜。とほほん。その後、私は5時にマンディーをするという修行僧の生活を続け、一ヶ月後には世俗のアカをすっかりうちすてて、心身共にリフレッシュし帰国した。

そ・し・て…、成田に着いた私は、ズボンのポケットにアユのゲストルームのキーが入ったままになっていたのを見発する。「るっぱ〜〜!!」



バリの舞踏



ブンブン・ゴビョグ (Bumbung Gebyog)



このガムランの存在を知ったのは春秋社出版の「神々の島バリ」第七章・皆川厚一氏の“ガムランの体系”を読んだ時だ。皆川氏の本文を引用させてもらおうと…。

<ブンブン bumbung 類>

ブンブンとは、竹を筒のまま片方の節を残した状態で切った閉管で、節の位置で空気柱の長さを調節する。これを縦に持って底を固いものにうちつけたり、閉口部に口につけて吹いて音を出す。前者の例ではブンブン・ゴビョグという、稲の脱穀作業から発達したといわれる芸能が残っている。これは複数の女性が長さの異なる竹筒（ブンブン）を一人一本ずつ手に持ち、それぞれ異なったリズムで、細長い臼のような固い素材の台座に撃ちつけるものである。

また金属の鍵盤楽器の共鳴筒として用いられる竹筒も、やはりブンブンと呼ばれる。

この解説を読んだ時、JEGOGの元祖説にはいろいろあるが、ひょっとするとこのガムラン・ブンブン・ゴビョグなるものがJEGOGの元祖ではないかと、私は密かに想像し新たな発見に胸が踊り、是非一度聴いてみたいという衝動に駆られた。思い立ったら実行である。竹に関する事なら、まず、(財)スアール・アグンのスウェントラ、和子夫妻に聞けと親の遺言でもあり(!?) さっそく連絡を取った。「ブンブン・ゴビョグを聴きたい」と私が唐突に言うと、和子さんは「ヌガラにあるよ。でも、演奏できる人はお婆ちゃんばかりだから、早く聴いておかないと今に無くなってしまふよ。」と言われ、さっそくチャーターすることをお願いした。

インドネシア語で竹のことをポホン・バンブー (Pohon Bambu) と言い、切り倒された竹を一般的に単にバンブーと呼び、筒状のものはブンブンと呼ばれている。

そして、いよいよヌガラへ。ガムラン・ブンブン・ゴビョグは、すでにスウェントラ氏宅の庭に準備されていた。われわれが到着してしばらくすると演奏が始まった。

6人の女性が右手にブンブン・竹筒(太さは直径7cmほど、長さ60cmから80cmまでのまちまちの節の抜かれた筒)を一本ずつ持ち、幅20cm、長さ2m50cm、厚み3センチほどの木の板(工事現場で使われる足場板のようなもの)に降り落とし、カタカタカタと単調なリズムを叩きだした。六人の女性は、和子さんに言われたようにやはりお婆ちゃんたちだ。このお婆ちゃんたちにルジャンを踊ってもらったら、きっと雰囲気だろうなと思い、演奏のあとルジャンをリクエストして踊ってもらった。やはり、思った通りの優美で神秘的なルジャンを観ることができた。そんなお婆ちゃんたちが無表情でもくもくと竹を降りおろして叩く演奏であるが、そのタイミングが微妙にずらされ、リズムカルで楽しい音である。これが稲刈あとの脱穀作業から考え出されたとは…。

いやはや関心してしまう。叩き出される音はJEGOGの高音に似ていて、やはりルーツはこれかと一人納得。

『BALI THE IMAGINARY MUSEUM』1995年発行 (The Photographs of Walter Spies and Beryl de Zoete : Oxford University Press) の写真223、224、225 (1938年撮影) は、どこかの村での撮影か明記されていないが、そのガムラン・ブンブン・ゴビョグには、前面に彫刻と彩色の施された額縁状のついたが取り付けられてあり、その前で6人の女性の踊り子が歓迎の踊りを踊る時のような衣装に、長いカインを足の間から引きずって踊っている姿が載っていた。スピースの説明では、踊り子は右手に扇を持ち、夢うつつの状態であったと書かれている。残念ながらヌガラで観たものは、踊りはなかった。ところで、ヌガラで演奏してくれたお婆ちゃんたちがいなくなったから、いったい誰がブンブン・ゴビョグを受け継いでいくのであろう。ほかの村にあるという話も聞かないし、また、ひとつバリの芸能が無くなってしまふのだろうか。和子さん、そこところもよろしく!…と、期待する極通スタッフでした。





■男はつらいよ

映画の話ではない。実話である。さる11月の出来事、“Merasa pelayanan yang diberikan suaminya kurang memuaskan, Nyoman Wati-bukan nama sebenarnya-nekat menguat suaminya untuk cerai / 夫のサービスに満足できず、ニョマン・ワティ（匿名）離婚訴訟に踏み切る”

こんなこと新聞に書きちゃっていいの？と思わず首をかしげたくなる話題を平気で載せるのが、Bali Postの面白いとこだけど、このニュース(?)もそのたぐい。Sayanに住むこのカップル/pasangan、55歳になる夫はUBUDのある小学校の校長先生/kepala salah satu SD di Ubud。そして、妻のWatiさんは、36歳の女盛り、まだまだこれからよとばかり、今でもUBUDの舞踏活動をしている/mempunyai aktivitas menari di Ubud。匿名とは言え、なんだかこれだけでもう身元が割れてしまいそう。あげくにこんなことまでバラされてしまうとは、“Selain itu, menurut Wati, suaminya tidak mampu memuaskannya di tempat tidur / さらにWatiによれば、ベッドでは妻を満足させる能力もないそうだ”

かわいそ〜、校長先生。

■こんな、悲劇も…

妻が満足できない、それは大いに問題だ。だからといって、こんな事を夫の目の前で言ってしまったら…。

事件は、Kota Gianyarの近くで起きた。もともと夫婦仲が悪く別居中のNi Made YとI Ketut Gだが、最近になって離婚についての話し合いを重ねていた。だが、重ねていたのは協議だけではなかったらしい。

“Diduga, dalam rangka konsultasi perceraian itu,

pasangan ini kembali sering bertemu sehingga berlanjut dengan hubungan badan lagi / 離婚協議をまとめるためしばしば両者は会っていたが、再び肉体関係にまで進んでいたものと疑われる”

これから別れようっていう人間が、会うたびに肉体関係/hubungan badanを結んでしまう、なんとも理屈では割り切れない性の落とし穴。そして、より危険な落とし穴がふたりを待っていた。

加害者Gの自供によると、“Tidak tahan mendengar celoteh istri yang selalu memuji ketangguhan bekas pacarnya dalam berhubungan badan / 妻のたわごとが聞くに耐えなかったんです。いつだって昔の恋人のセックスの強さを褒めるんですから”

この日もそうだった。カッととなった夫は、椅子の下にあったナイフに向かった。そして、有無を言わず / tanpa banyak bicara、裸のままベッドに横たわっている妻の首を切りつけたのだ。 / korban yang lagi terbaring tanpa seherai pakaian pun di tubuhnya itu, lehernya langsung dibacok.

結局、被害者は出血多量で命を落としてしまう / tewas karena luka-lukanya yang banyak mengeluarkan darah。悲惨である。しかもこの兩人、ともに小学校の教員。加害者である夫は宗教の授業を受け持っていた。

ちょっと、話が陰気臭くなってしまった。まあ、男と女の間には実にいろいろと問題が起きるわけで、この間 Lombokへの移住者/transmigranの中に、とんでもないことに、他人の女房を自分の妻と偽って連れて行ってしまった男がいて、当局にバレてしまった。これなんかまだ笑える…でしょ？ えっ笑いごっちゃない!?



バリ日記

ウブド大好き!

渡辺一郎 & 小堀桂子

2回目：1996年4月28日～5月4日／その1

前回のバリ旅行帰りに、もう一度バリに来るぞ!と、帰りの飛行機の中で決めて、そして1年後、やっとやっとな行ってきました。

しかし1年間、ぼーっと待っていた訳じゃ無いのだ。昨年は、初めて行く場所なので、飛行機&ホテルそして空港の送り迎えをバックにしたツアーを旅行会社に造ってもらったのだけど、これがまた費用は高いわ、フライトの返事は遅いわでサイテーだった。で、今年はなるべく自分達でやろうということで、飛行機もホテルもダイビングの予約も、それぞればらばらのところへ自分達で手配した。これがヒマな学生ならともかく、私たちは2人も働いているのでそれぞれの会社との連絡が思うようにとれず、時には会社の電話からどなったりして(したのは私です、失礼)、なかなか大変。でも苦勞の甲斐あって、去年より約2割も安く、そして11月にはフライトも決まってバリに行けることになったのだ。すごいでしょ?去年の旅ではウブドがとても良かったので、今回の旅のメインはウブド。そして去年はビーチには行ったけど海には入らなかったの、今回は1泊2日のダイビングサファリ(ダイビングをしながら移動し、宿泊する)で思いっきり海に入ろう、ローカルなビーチにも行ってみよう、という計画。(桂子)

■ 1996年4月28日

5:30に目が覚める。海外旅行の時に、予定より1時間早く目が覚めるのはいつものこと。一郎も目覚めている。いよいよやなあ、と喜びをかみしめる。6:40起床。洗顔、ゴミ出し、猫のえさやり。7:20MKタクシー着のTEL。予定より10分も早いので、火の元を確認しばたばたと出かける。京都駅に行く途中に桂子の会社に寄り、会社から持ち帰って昨日仕上げた仕事をポストに入れる。さ～、

後は知らんで、ヨロシク!

京都駅着。今回は個人旅行で手元に飛行機のチケットがあり、利用飛行機がJALの関連会社の日本アジア航空なので、はじめてCATを利用してみる。ま、要は普通は空港でするチェックインが京都駅ででき、カウンターが空いているのでほとんど待たなくてもよいし、何より荷物が京都駅で預けられるというのが最大のメリット。今回は知らなくて出発2時間前に関空に着くはるかを予約してしまっていたけれど、CAT利用ならあと30分は関空着が遅くてもよいようだ。一郎は荷物を早く預けられるのがとても気に入ったらしく、「今度から旅行する時は、ちょっと高くてもいいからCATが利用できる航空会社を使おうぜ」な～んて言っている。(桂子)

京都駅8:42発はるか。クーラーが効きすぎていて寒い。関空着。11:00発ロンドン行きのY某夫妻をお見送り。しかし時間になっても待ち合わせのゲートにヤツらは現れない。ウ～ン。あらぬ想像までしてしまうではないか。この人達、しんこんりょううだぜえ。それをうどん食って、見送りの人より遅れただあ?(一郎)ゲートの前で「いってらっしゃーい」と手を振る私たちを、関空のスタッフの人たちが不思議そうに見ている。やっぱりゲート前での見送りって珍しいのかな。出発ゲートで待っていると、私たちが乗る日本アジア航空の飛行機の向こうに夫妻が乗っている英国航空の飛行機が近づいてきた。記念にパチリ。

前回はゲーム乗り換えのバリ行きコンチネンタル航空だったが、今回は日本アジア航空の直行便。飛行機同乗者がクタビーチに群れているサーファー野郎どもばかりだったら嫌だな、と思っていたら、何だかおじさん・おばさんが多い。中には登山のリュックをしょった人なんかもいて『?』。これはデンパサール(バリ島)経由ジャカルタ行きだから、ポロブドゥール遺跡に観光に行く人たちなんやろうか。

搭乗。窓際の席を希望しても、禁煙席なら羽の上で下の景色が見えないことが多いのだが、今回はそれもクリア。

うん、さい先いいぞ。あれは四国か九州か、などと言いながら時間をつぶす。(桂子)

スチュワーデスは中国(台湾?)のねーちゃんだ。めしはまあまあか。Beer 飲んで寝る。フライトは約6時間半。結構ハード。(一郎)

食事はいまいちと桂子は思う。あと30分で到着、という時にトイレに立った桂子が、トイレ出口付近にはあってあったおもしろ地図を発見。日本からバリ島・ジャカルタまでの地図に、それぞれの地点の通過時間やフライトプラン(高度10Km、速度720Km、飛行時間6時間10分)、乗客を象に見立ててくつろいでいる様子等が色鉛筆でかわいく書かれている。地図と象が好きで桂子はその地図に見入っていると、スチュワーデスさんが「差し上げましょうか?」ときたもんだ。やったあー。左横の席に座っているカップルの女の子が「いやーん、いいなあ。わたしもほしいわあ」なんて言ってるけど知るもんか。コレは私んだもんねー。

席に帰って、一郎に自慢。が、ふーん、とあんまり感動がない。ちえっ、しょーもないの。

バリ島・ングライ空港着。今日宿泊のホテル・ポピーズのスタッフがお出迎え。有名なクタビーチのサンセットシーンを見せに、わざわざ連れていってくれる。10,000Rpのチップを進呈。(桂子)

ポピーズはバンガロースタイルのホテル。気に入った。お写真撮りまくり。ニコンFでシャッタースピード4秒。写ってっかな。めしはホテルと同系列の、レストランポピーズ。まあまあか。ナシチャンプルー80点、ヤサイカレー60点、ガドガド80点、フルーツサラダ80点、ビンタンビール(ビン&生)80点。(一郎)

まあまあかって、あんた。飛行機の機内食も「まあまあか」って言ってたけど、あれと同じってことですかー。それでこの高い点数はないと思いますけど。ポピーズはガーデンレストランで、雰囲気も良く、桂子はとっても気に入りました。もしクタビーチに泊まる人がいたら、このレストランとホテルは間違いなくオススメですよ。

夕食後、ジャランジャラン。桂子はビーチサンダルを今日中に買わないといけなくて、それと水、ビールを捜して歩く。1軒目の店ではちょっといいかなあ、というぐらいのやつを35,000Rp(1750円)と言われ、あきれて退店。(5,000Rp(250円)にしろ、といったのをあきれられたにちがいない。)2軒目は足にフィットしたいやつを25,000Rpから12,000Rp(600円)に値切って購入。一郎はキャップ(帽子)が欲しいというので捜すが、見つからず。

今日泊まるクタビーチは、にぎやか。物売りの初めの価格はめっちゃめっちゃ高く、詐欺に近い。子供を連れた物乞いも多い。物乞いにはお金を払わない主義なので、そのまま歩く。せめて何か芸でもしていたら考えるのに…。暗い道で、「マヤクアルヨ」と声をかけられる。おっと、アジアには何回も来ているけど、こんなふうには声をかけられたのは初めて。ちょっとびっくり。(桂子)

「マヤクアラナイ」主義なので完璧にムシ。(一郎)

猥雑な雰囲気ちょっと疲れて、水とビールを買っても

うホテルに戻ることにする。がホテル近くのサリサリストアは閉店。ガンポピーズ(ポピーズ横丁)を西へ。身体にガンガンに入れ墨をした、でも優しい顔つきの兄ちゃんのサリサリストアを発見。大びんの水(1500Rp)と小びんのビンタンビール(2500Rp)2本を買う。1万Rp札を出し、お釣りは目の前で数える明朗会計。クタビーチにもこんな店があるんだ、とちょっと安心する。

ホテルに帰る。一郎がフロントで、「蚊取り線香が欲しい」と身ぶり手ぶりで訴えてくれる。「メニィ・モスキート、インマイルーム。モスキートスモーク(?)プリーズ」。訴え、成功。本来なら、引き出しに入っているはずのペーパーマットが入ってなかったの、よけい話が混乱したよう。一郎は家計簿つけの後、ビールの酔いと疲れで寝てしまっている。(モスキート交渉でエネルギーを使い果たしたのだ。)明朝はダイビングサファリに行くので、5:30起床。私も早くお風呂に入って寝なけりゃ。

ポピーズのお風呂は、バリにはよくある庭に半分だけ天井があるタイプ。さらにバスタブではなく、プールみたいに階段を降りて大理石でできた浴槽に入るといって、豪華で凝ったもの。浴槽にお湯を張ると、すごく大きいのでたくさんお湯がいったので、一人だけで入るのはもったいないので、一郎をたたき起こして一緒に入る。二人並んで足を伸ばしてもまだ余裕がある。露天風呂の雰囲気。バグース!

どこからかガムランの練習する音が聞こえる。ダイビングショップより明日の迎えの確認のTEL。6:10→6:30になった。バグース。

■ 1996年4月29日

5:30起床。外はまだ暗い。洗顔&荷物整理。ポピーズはすごくいいコテージなので、1泊だけでももったいない感じ。これがクタじゃなく、ウブドにあるんだったらなあとおふたりで言う。何気なく外に出てみたら、外のテーブルにバナナ4本とあったかいTeaが届いている。感激!バナナと持ってきたクラッカーとTeaでカンタンな朝食にする。

6:25TEL。ダイビングショップの人がもう来てくれたとのこと。慌ててロビーに向かう。チェックアウトにちょっと時間がかかり、6:35出発。(桂子)ダイビングサファリのメンバーは全部で7人。神奈川のSさん(レスキューのライセンスを勉強中の美少女風ねえちゃん)、北海道のOL二人(イケイケ風先輩&後輩)、インタビューをやっているというおねえさん(ワガママなお姫様風)、独身遊び人のオジサン(サゴジョウ風頭)、そして私たち二人(プタおばさん&極左活動家風・自分で言うのもナンですが)。ガイドはアリさん。真っ黒に日焼けしているから、自称悪魔。今日はバリ北部のムンジャンガン島で2本潜り、ロビナビーチのアディティアバンガロー泊の予定。温泉もあるらしいから楽しみでR。

我々一行の車は2台。1台は機材運搬のトラック。もう1台が人間運搬のボロミニバスだ。一応、ダットサンだの、トヨタだのとエンブレムはついているが、明らかに日本車ではない。こちらの日本車は、組み立てやボディーそのもののデザインは現地メーカーらしい。機材車にはパスポートが入った俺のスーツケースがぶん投げて積んであるのが見える。2台とも思い切り荒っぽい運転だ。スーツケースが荷台で跳ねているのがはっきりと見えてしまう。げ!パスポート入ってんのよ、パスポート!再発行のために旅行日程を全てキャンセルし、領事館に留め置かれる自分を想像する。領事館でバリにあったかなあ。ジャワかなあ。やはり行動とか制限されんのかなあ、会社にも迷惑かけるなあ、などとグダグダ思っていたら、先行の機材車が道端に停車しているのを発見。バスから飛び降りて機材車へダッシュ!機材の山からスーツケースを探り当て、愛しのパスポートを救い出す。我々のスーツケースだけをキチンと積み直したのは言うまでもない。目的地まで悪路3時間もかかる。イ〜ジ〜な現地スタッフには任せておけない自衛措置。(一郎)

車はガンガンとばし、人はうたた寝を繰り返し、おなか減ったのとトイレにいきたい限界が近づいた11時ころ、やっとビーチ着。トイレ(1人200Rp)と遅い朝食。アボガドジュースとミックスジュースを注文するも「ない」と言われ、フルーツサラダとマンゴソーダ、サンドイッチとコピを頼む。マンゴソーダ以外はGood!

ちょっとくつろいだ後、船に乗って沖へ。ザブン!ダイビング。何だか思うように潜れず、メチャしんどい。見るに見かねたアリさんが水中で手をつないでくれる。ナポレオンフィッシュの小さいのがいたらしいが見れず。ミノカサゴは見る。船に上り眼鏡をかけたら、頭がくらくらする。そんなに疲れたのかなあと思ひながら、レンズを拭こうと眼鏡をはずすと、何とレンズが片方はずれているではないか!旅行ガイドの持ち物の欄に『予備の眼鏡を持って行きましょう』とかよく書いてあるけど、まさか自分が眼鏡を壊しこんな不自由なメにあうとは思ってもみなかった。ムンジャガン島に上陸して昼食。疲れと波酔いであまり食べられず。ちょっと、ひるね。

2本日はまだ楽に潜れた。が!今度もアリさんに手をつながれてしまう。結構キズつく。船でビーチまで戻り、休憩。海の家風のワルンでウダウダ。車で出発。

5時半、アディティアバンガロー着。思っていたより質素なホテルなのでちょっとがっかり。桂子がシャワーを浴びている間に、一郎が眼鏡をなおしてくれる。私にはとてもできそうにない技。すごく助かった、ありがとう。7時半にみんなで夕食の予定だったが、部屋でシャワーを浴びたら、(とまあ今スグに!)ビールが飲みたくて&おなか減ってたまらなくなる。6時半、2人で夕食を食べることにする。とりあえずホテルのフロントに行き、明朝のドルフィン・ウォッチングの予約(1万Rp×2人)。(桂子)

さあ飯だ!いつものナシチャンブルーがないので、ナシゴレンスペシャル、ソトアヤム、ガドガド、魚のからあげ、

ビントンビール2本。魚の唐揚げとソトアヤムが思いのほかおいしい。(一郎)

子猫4匹、レストランに入ってきてじゃれている。一郎がエビせんべいをあげているが、ウエイトレスさんに追い払われてしまう。7時半になったのでみんなとの会食をキャンセルすることを伝えに行かなければならない。ジャンケンポン、当然、桂子の負け(渡辺とジャンケンをすると、なぜかいつも8割は負けてしまうのだ)。

食事を中座して待ち合わせ場所に向かう。アリさんに「夫がつかれているので早く寝ます」と伝える。快諾。ドルフィンウォッチング予約の話をする、「ワタシのフレンドなら、8,000Rpで7時半に帰ってこれて、朝ごはんも食べられますよ」と言う。それを早く言えよなあ〜!北海道のOL二人もホテルの予約をキャンセル。私たちがアリさんのほうに乗り換える。

レストランに戻るとテーブルの上が片づいてしまっているので(私まだ食べてたのに…)、デザートを頼む。フルーツサラダとアイスクリーム。日本でフルーツサラダというと生クリームやヨーグルトであえてあったりするけど、バリのそれはカットフルーツ盛り合わせ。ふんだんにバナナ・パイナップル・パイナップル等が盛っており、ライムを絞っていた。う〜ん、とってもバグース!今後、メニューにあるレストランでは必ず頼むことにする。8時過ぎに部屋に帰り、ベッドに横になるなり、即、寝入ってしまう。12時過ぎにいったん目覚め、灯けっぱなしにした電気を消してまた寝る。(桂子)

■ 1996年4月30日

5時起床。まだ闇夜。外からは「ナ〜ンヤラア〜、カ〜ンヤラア〜」と単調な調べ。ホテルのBGMにしてはひどい音質だし、なんだろう。ここはバリ北部。最もジャワに近いところ。文化もジャワに近いのだろう。ジャワはイスラム教。だとするとコーランの調べか。こんな南のイ〜ジ〜な島によくあんな戒律きびしい宗教が根付いたもんだ。早起きコーランの後によくコケッコ〜とニワトリの声。

さてイルカ見物である。まだ真っ暗のビーチから3人ずつボートに乗り込んで沖へ出る。ホテルで正規に申し込んだ連中は、ライフジャケットなど着せられているが、モグリ業者に頼んだ我々には当然そんなもんはない。

ボートは全部で50隻ほど。イルカの背びれが見えるたびに追いかける。イルカはビビってすぐに潜水してしまう。その繰り返しが続く。200mm望遠レンズを着けてイルカを捉えようとするが、「見る」行為に集中してしまい、お写真をなかなか撮れない。それもヤヤコシイ古式カメラのニコンFだ。ベトナム戦争のころのカメラマンはよくこんな機材で突発的な戦場シーンに対応できたものだ。あたしでは到底ムリですな。左目でイルカを捜しながら、右目でカメラを覗く。左右の視角がメチャクチャ違うので疲

れて来る。あ～～～!いた!いた!いた!桂子がイルカの群れを見つける。船頭さんがそれを追い、他のボートがついてくる。すげえ群れだ。その数、10頭ほどか。今回はカメラに集中できる。1枚くらいはマトモに撮れているだろう。(しかし結局これが惨敗。AFカメラを買う口実となる)桂子はイルカを見れたことでホントに感涙にむせんでいる。おれには全く理解できない。(一郎)

桂子は一度水族館で、自分の足元から5m位の高さのある水槽の中でイルカがとても気持ちよさそうに泳いでいて、そのガラスにぺたっと張り付いてそれを見ていたらイルカが寄って来てくれた、という経験をしたことがある。手を広げたらまるで抱きかかえることができるようなところに、ただ1枚のガラスを隔てて存在したイルカ。それから一度でいいから水族館ではなく大海原で泳ぐイルカを見てみたい、できることなら一緒に泳いでみたい、というのが桂子の夢だったのだ。だから今回は本当にイルカを見れたことにすごくすごく感動して、涙が出て来たってわけさ。(ふ～～～～～～～～～～～～～～～～ん。)

しかし残念なことにタイムオーバー。船頭さんが残念そうな顔をしてみせて、浜に戻るとジェスチャー。船頭さんに見てみたら毎日見ているもので、そんなに珍しくもないだろうに、そんな残念そうな顔をしてくれて、ヤサシイグネ。このイルカウォッチングは、イルカの背びれが見えたら素早く舵を操って近づいていったり、イルカがなるべく驚かないようにエンジンを手前で切って惰性で近づいていったり、と、いいタイミングでイルカを見るためには船頭さんの力量にかなり左右されると思う。そういう意味では、私たちの船頭さんはかなり優秀だったと思う。そしてなぜか船の舳に同乗していた、私たちのミニバスの運転手さんも、私たちよりずっと目がいいらしく、真っ先にイルカを見つけ出してくれた。船頭さんとイルカ捜し役のおっさんに感謝のチップをはずむ。お二人とも、ホントにありがとね。

それにもし眼鏡が壊れたままだったら、きっとイルカのほとんども見ることができなかったと思う。そう思うと、一郎にもすごく感謝。(桂子)

同船したさごじょうおじさんと朝メシを食う。話題はタイのリゾートプーケット島のこと。ここには我々が今のところ世界で一番美味しいとしているTAMというレストランがある、と振れば、なんと知っているとのこと。世の中、狭いノウ(しかし!97年1月行ってみたら跡形もなく消えていった)。部屋に帰って荷造りをする。今日は東部のアメッドに移動してまたダイビング三昧だ。(一郎)

車に乗り込む前、ホテルの庭掃除をしていたおばあさんが「スラムパギ」と声をかけてきてくれた。スラムパギはグッドモーニング、〇〇は☆☆、と、カタコトの英語で私たちにインドネシア語を教えてくれる。それが全然押しつけがましくなく、すごく嬉しかった。掃除の仕方までマイペースで、お客に「大変そうやなあ」という気にさせない。こんな大きいホテルの、木が豊かな庭を掃除するなんてホントに大変なことだろうに、そうまるで物語「モモ」

にでてくる掃除夫ベッポのように「眼の前の一步、目の前の一掃きのことだけ考えていると、いつか大きな仕事も終わっているものだよ」とでも考えているかのように、ゆったりしている。今回の旅で出会った人のなかで、すごく印象が深い人だった。(桂子)

このおばあさんと、一緒にお写真パチリ。この人、じつにイイ顔していたんだよなあ。ブダダヤんもこ～ゆ～ふ～にバアサン化してほしいものです。

8時出発。車はブレレン港を通過する。パリの表玄関は、いまでは空港のあるデンパサールだけけど、その昔はここブレレンだったのだ。30年代のバリおたく、コリン・マックフィーそしてミゲール・コバルビアス。彼らの名著もブレレンの街に上陸するところから始まっていたわけ。ま、横浜とか神戸みたいなもんか。

車はどんどん飛ばす。窓から聖なる山、アグン山が見えてきた。この山は60年代に大噴火。おりしも外貨獲得のため100年に1度という式典を強行していた島は大被害にあったという。たしか中村敦夫がこの噴火をクライマックスにした小説をかいていたわけ。「ジャカルタの眼」だったかなあ(ワープロ打ちしている今、改めて本棚さがしても所在不明)。噴火はすげえ規模だったのだろう。溶岩が海へとながれ落ちた跡には30年たったいまでさえ草一本生えてない。ニコノスで激写す。

アメッド着。今回は我々一行だけではなく、日本からわざわざダイビングライセンスをとりきた連中と一緒にいる。海洋実習というやつで、まあ、自動車免許の路面教習ですな。みんなマジメに講義をうけている。我々一行がウダウダしている横で講義をしているので、イヤでも聞こえて来る。既にライセンスを持っている我々だが、基礎的なことを驚く程忘れていて、次第に真剣に聞いてしまっている。そーか、緊急時にはそーやるのか。水中でパニクる相手はこうあしらえばいいのか。感心しているのはペーパーダイバーの俺だけだと思ったら、我々一行全員真剣に聞いている。レスキューライセンスという上級免許をねらう、かのS美少女までフンフンしている。ダイジョウブかよ。

ダイビング1本目。さすがに慣れてきて、中性浮力(水中に自在に静止)もうまくいく。しかし、いいかげんに装着してしまったのか、BCジャケットがはずれそうになる。水中でゴチャゴチャやってたら、アリさんがすぐに助けに来てくれる。彼は丘の上では100%しょ～～～もないヤツだが、水中では別人28号、今までの5年間で知り合ったダイビングガイドの中でもピカイチだ。浮上、船でビーチへ戻り、めし。丘に上がったアリは、またしょうもないアリに変身してしまい、にわとりをいじめている。「アヤムかわいそう!」とワガママ姫が叫ぶ。「アヤムばかりかわいそういってもらって。アリ、かわいそういってもらえなあ～い」。バカか、あいつは。

2本目。さすがに潜ることに飽きて来る。しょせん、俺はダイバーにはなりきれないのだろう。7年程前、

石垣島で初めて潜った時は、世の中にはこんなステキなことがあるのかと、ものすごい感激をしたものだった。今でもその時のシーンが頭から離れない。初めての時はなんでも美しく美化されて、思い出のストックとしてデッチあげられているのだろう。残像であり続けるあのひとはいま元気なのだろうか…などと、インドネシアの海の中で思いにふける。俺はバカか！浮上するまでクルリン、クルリン宇宙遊泳ごっこをして遊ぶ。浮上。(一郎)

渡辺が感傷に浸っているその時。桂子は悲痛な思いで浮上を待っていた。船からエントリーし、水中を降りていき、もうそろそろ中性浮力をとらなあかんな、と思ったその時。左ひざに電気が走ったのだ。「何かに刺されたんだ!」。とっさにそう思い、後ろを振り返って見るも、海草がユラユラ揺れているばかり。左ひざは痛くて伸びないし、泳ごうと思っても力が思うように入らない。もし、オニヒトデに刺されたのだったら、すぐに治療しないと命に関わることもあるのでは…? イカゲンな様々な知識の断片が頭をよぎり、不安で胸が苦しくなって来る。ダイビングは団体行動が基本。よほどのことがない限り、一人で浮上したりはできないし、それもガイドの許可と指示なしにはできない。

アリさんに胸が苦しいといおうか、でも胸が苦しいというジェスチャーはどうするんだっけ(海中ではもちろん言葉が交わせないため、会話は全てジェスチャーで行う。これも海洋実習で習ったが、100%忘れてしまっている)。足を見ると、腫れてきている。やった!これなら的確な判断をしてもらえる!アリさんに近寄って行って、足を指さす。「ダイジョウブ、ダウジョウブ」というように、手を振られてオシマイ。……。ま、(海の中の)アリさんが言うことなので、たぶん大丈夫だろう。あと30分を耐える。やっと浮上。上がって、アリさんに見せると、クラゲに刺されたんだよとヘラヘラ笑う。笑うなよ、痛いねんで。でも日本でクラゲに刺されても2~3日で治るらしいけど、南の島のそれは種類が違うのか、10日間も痛みと痒みが続き、1ヶ月たった今でも跡は消えていない。(桂子)

さてこれにて我々のダイビング三昧は終了。他のメンバーは帰国したりダイビング三昧を続けたりとさま



ざまだ。我々はこれからウブド三昧の日が始まる。バスに乗る。飛ばせ飛ばせ!ウブドに遅くとも6時半に到着しなければならないのだ!チャンディ・ダサで一行とお別れ。夕暮れのたんぼのわきでマンディー(水浴び)をするひとびとがいる。そんな暮らしかた、時間の使い方をすこしでもマネしたいものだけど、飛ばせ飛ばせ!ダイビング屋のバスはサカというところで我々を降ろし、そこから勝手にウブドに行け、という。ま、あらかじめ決まっていたことだから、心の準備はできてはいたが。さすがに心細くなったのか、桂子はダイビング屋にベモに乗るまでは付き合ってもらわなきゃ困ると頼む。運賃交渉をしてもらって乗り込む。1000×3で3000Rp(150円)ね。でかいスーツケース2個で一人分の運賃ね。はいはい、と。

さあ!ウブドへ飛ばせ飛ばせ!急ぐのには理由があるのだ。今夜ウブドではスマラ・ラティーというトップクラスの舞踊チームが公演するのだ。リーダーのアノム氏はカリスマ的な存在だという。彼の、戦士出陣の踊り、バリスダンスが観たくて俺はバりにやって来たのだ。ダイビングは桂子のおつきあいにすぎない!俺はバリスダンスが好きだ。去年、観光客向けレストランのしょうもないショーの中でさえ唯一光り輝いていたのがバリスダンスだった。ウブドものエッセイの最高傑作と勝手に思い込んでいる南部ヒロシユ氏の「ビンタン涅槃楽」でも絶賛していたアノム氏だ。さあ!飛ばせ!飛ばせ!

1年ぶりにウブド着。ともかく公演のチケットを手に入れるために、観光局へ。重たいスーツケースをガラガラ引っ張り、でこぼこの歩道を歩く。やっと着いた!「スマラ・ラティーのチケットくださいな」「コンヤダンスハ アリマセン。カレラハ イマ ヤスンデイマス」2秒ほどの沈黙の後、“……………ギャ~~~~~×1000億乗!!!!”“コノヒノタメニ バリニ キタノニ~~~~~!!!!”

気落ちの中、ただでさえ重い荷物がまた一段と重くなり、本日の宿、オカワティーまでの長い道のり。疲れ果てた我々にタクシーやものうりが容赦なく襲いかかる。うるせえ!やっと見つけたオカワティー・サンセット・バンガロー。しかし我々の部屋はたんぼの向こうの別館だという!しかも2階だ!2階までスーツケースを運んだ時点で完全にキレてしまう。口も聞けぬほどイッキに疲労が爆発し、倒れ込む。部屋付きのボーイはニョマン。OGなまりのデタラメ英語だ。ニョマン、おねがいだ。おれは疲れているんだ。デタラメ英語でいらないチケットをしつこく営業するのはやめてくれ。

ともかく気を取り直して、シャワーを浴びてメシ食いに行く。ジャランジャラン。さて、しきりなおし。1年ぶり、2回目のウブドである。メインストリートは2本。どの通りに、何があるのかくらい、チャントわかってらい。メシはムンブルズ。溪谷の崖っぷちにあるレ

ストランド。昼間だったら即、崖側のテーブルにつくところだが今は夜。まずはビンタンビール。ガドガドだ。ポークのサテだ。ソトアヤムだ。ナシチャンプルーだ。(一郎)

サテは素焼きの陶器の中に燃える炭が入り、その上にジュウジュウいいながら7本の串がのったものが運ばれ、それをピーナツタレにつけて食べる。うーん、バグース。ソトアヤムは昨日のものより春雨がいっぱい入ってオイシイ。ソトアヤムは去年は一度も食べなかったメニュー。もったいないことしたと、悔やまれる。ナシチャンプルーは店によってのっているおかずが違おうし、おかずが日替わりの店もあって、いろいろなおかずを少しずつ食べたいけれどそれが難しい私たち個人旅行者には持って来いのメニューなのだ。インドネシア料理を気にいったのは、おかず野菜が多い、それも野菜の種類が多いこと。イギリスに行った時は、どこのレストランでもじゃがいもとにんじんとブロッコリーまたはグリーンピースの茹でたのばかりで閉口した。野菜を食べるのにちょうどいいメニューがガドガド。が、ムンブルズのガドガドは、スマトラ島風とかいって、むちゃむちゃ辛く、とても食べられなかった。

スマラ・ラティーは見れなかったけれど、やっとウブドに来れたねえ、と二人でしみじみ語り合う。帰りに水6リットルのボトルとビンタンビールをホテルへ入る路地のサリサリストアで買う。店のオバちゃんは、ここならビール1本4,000Rpだけどオカワティーは4,500Rpだよ、と言う。まっ、営業のうまいこと。ホテルには冷蔵庫がないので、そのつど買うしかない。ここは「ボトルを必ず返してね」とうるさい程に言う店なので、帰りにここでビンタンビールを買い、次の朝にボトルを返しに来るのが習慣のようになる。ビールを飲んですぐ寝る。

■ 1996年5月1日

夕べは早く寝たのに、一郎が寝苦しそうだったので何度も目が覚める。初めて泊まるホテルの初めての夜。バリはホワイトマジックとかブラックマジックとか何でもあり得るところなので、本気で心配する。6時に目が覚めて、「うなされていたねー、イヤな夢でも見たの?」と聞くと「いいや」という返事。何でもなかったのか、それとも記憶を失う程のマジックだったのかは未だ以て解らず。ただし、性格・気性の変化等は現時点では見られず。目が覚めて、今日の予定を検討するが、うだうだ言うばかりで決まらず、とりあえず朝市に行こうということになる。

部屋の世話係のニョマンが言うには、今日が3日に一度の大きな朝市とのこと。その割には店も、お客も少ない。でもうろうろする。

お目当ては天然塩とマンゴスチンと、去年バリで

初めて食べてすごく美味しかったパッションフルーツ。パッションフルーツは所どころの店にあり、5コ1000Rpで購入。秤で量っているにもかかわらず、そんなちよっきりの数字になるなんておかしい、きっとボラれているんやろうな、とは思ったけど、ま5コ50円やしいいか、と購入。日本に帰って、去年スーパーで買った記録を見ると、1コ100Rp強で買っていた。市場はスーパーより競争が激しく安いはずだから、倍ぐらいボラれたことになる。ポットおばちゃんにより、それで買ってしまった自分が悔しいなあ。

ウブドから東へ、海岸線へ出た所にクサンバという村がある。ここは海水を天火で乾かして塩を採るという、昔ながらの方法の塩田がある所で、とても美味しい塩が採れるのだそう。ウブドなら近いし、市場ならその塩が置いてあるだろうと期待して行ったが、見つからなかった。これもその後の話になるけど、帰りに、デンバサールの空港の中のプラザ・バリを覗いたら、あのクサンバの塩がキレイな籐の籠に詰められラッピングされて、おまけに『ナチュラルビューティーソルト〜お身体のお手入れに最適!』等と日本語で!書かれ、500gが20,000Rpで売っていた。……。

もうひとつの希望の品マンゴスチンも、季節はずれのためか売っていなかった。買い物はちょっと残念だったけど、頭に籠をのせたたくましいおばちゃん達が行き交う様子等を写真に納め、けっこう満足。最近テレビの企画なんかで、アジアエステが大流行。タイでタイ式マッサージを経験したことのある桂子は、バリでもエステかバリマッサージをしてみたいと思っていた。そんな桂子の希望が聞こえたかのように、極通にエステの店のマップと体験記が載っているではないか。でも体験した男性は「おじちゃんの前ですっ裸になって、マッサージ、アカスリをしてもらうなんて金輪際ごめん」とくくってあって、一郎も大きくうなずいている。じゃ、女の人だったらいいわけ?へんなの、と詰め寄っても絶対首を縦に振らない。仕方がないのでエステ風なのはアキラメて、純粋なマッサージをしようということにし、マップで当りをつけておいた。その店を、市場帰りに発見。一郎が値段を聞いてくれる(一人1時間15,000Rp)。歩いていたら別のマッサージショップを見つけ、いろんな国の言葉で『このマッサージはとても良かった』というようなことが書いてある広告が張ってある。CMに弱い一郎は、ここは自ら「値段聞いてくる」と行く(一人1時間20,000Rp)。ただしここは予約が必要なのだそう。ホテルに戻って朝食。

(その2へ続く…)

Toko ◇ BEST 店

ULUWATU

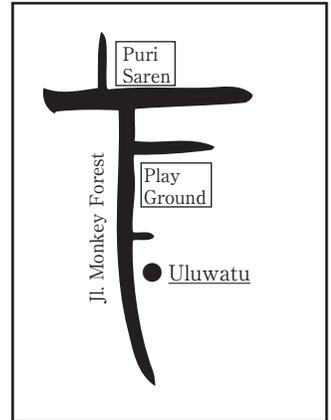
バリドレスで有名な、あの ULUWATU です。
 バリ7店目のショップがウブド・モンキーフォレストにオープンしました。

胸元や裾にカッティングワークや刺繍をほどこしたハンドメイドバリニーズレースのドレスの数々は、リゾート地でお嬢様するのにぴったりの清楚なデザイン。店内は冷房が効いていてひんやりと涼しく、試着もちろんOKなのでゆっくりお買い物を楽しめます。“でも、レースって取り扱いが大変なんじゃあ”という心配はご無用。素材はレーヨン（一部麻素材の製品もあります）なので、お洗濯はじゃぶじゃぶと水で洗ってアイロンをかけるだけでいいそうです。嬉しいのはサイズがとても豊富に揃っていること（XS,S,M,L,XL）。どう見ても欧米人向けサイズのお洋服に、「デザインはかわいいんだけど…」と悔しい思いをすることの多いウブドのお洋服屋さんにおいて、サイズがXSからある、というのは嬉しい限り。

ドレス以外にも数は少ないけれど、テーブルクロスやクッションカバーなど、ULUWATU ならではの洒落たリビング雑貨もあり、民芸品としてはひとあじ違うお土産にも最適。

場所はパサールからモンキーフォレスト通りを歩いて、左側。インフォメーションセンター APA のすぐ近くです。

Jl. MonkeyForest, Ubud Tel:(0361)977557 / OPEN: 8:00-21:00



Warung ◇ 味な店

Kafe Batan Waru

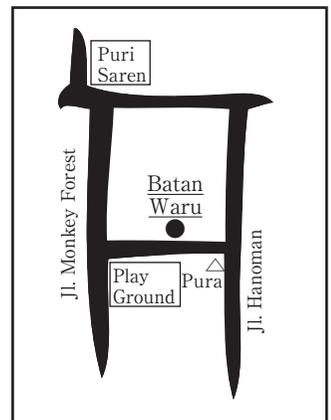
インドネシア料理とバリ料理を、とってお洒落に味わえるお店です。

MSG(Monosodium Glutamate)【グルタミン酸ソーダ、つまりインドネシアでは超有名な“味の素”に代表される化学調味料のこと】を一切使用していません、とメニューには但し書きがついています。

料理は一皿一皿、とても丁寧に調理されている、という印象です。MSGを使っていない分、スパイスとハーブをふんだんに使っていて、インドネシア料理特有の、辛さの中にある複雑な味わいを楽しめます。メニューはお馴染みのナシチャンプルーやアヤムゴレンなどに混じて、オポルアヤム（鶏のココナッツミルク煮）やルンダンサピ（牛肉のココナッツミルク煮）などバリのレストランではちょっと珍しいインドネシア料理があるかと思えば、ラワールやサラダなど正統バリ料理まで。特にクマンギやミントなどのハーブがごっそり入っているイカンペベス（すり身魚の蒸し焼き）は、後を引く美味しさ！すべてのお料理には、自家製のサンバルがついてきます。このサンバル、辛さは少し控えめなのですが、使うべきスパイスはきちんと使っている。ただ辛いだけのサンバルとは一味もふた味も違って、これは試す価値あり！辛いのは苦手という人は勿論、辛いのが大好きという人もぜひ一度味わってみてください。

ビールやワインの種類も豊富。ペリエが置いてある所もまたちょっとお洒落。夜遅くまで欧米人で賑わっています。

Jl. DewiSita, Ubud Tel:(0361)977528 / OPEN: 8:00-24:00



Tokoz Sayang + お店紹介

バリ恋愛症候群について

- 最終回 -

長期滞在者 M 嬢

どうしてバリが好きなのか、と問われると、いつも明確に答えられない。何か理由をつけて説明してみるのだが、そうじゃない、なにか何か違う、そういうことではなくて何か…。言葉に出来ないもどかしさが残る。そんな時私には、思い出すことがある。

初めてバリに来た時の事。夢のような一週間が過ぎ、帰国の日の夕方。私は何気なくホテルの子に聞いた。“バリには悪い人はいないの？”彼はしばらく考えて、そして言った。“います。バリにもいる。日本にもいる。なぜなら人間はみんな持っています。良い心、悪い心。だから神様に祈る。悪い心出てこないように”

人懐っこい笑顔の明るい人達…ゆっくりと流れている時間…。バリを訪れた人はまずここに虜になる。ここにいると素直な自分になれる。こだわっていた事が、ここに来ると何の意味も成さない事を知る。そうして多くの人がバリを“楽園”だと感じる。

けれど本当にそれだけ？何度かバリに通う内、わからなくなってくる。穏やかな笑顔の裏に底知れぬ暗いものがある。声をひそめて教えてくれる、ブラックマジックの話…。

バリの人はこの世界が“バランス”で成り立っていることを知っている。神様に捧げ物をする。悪霊をなだめる為に同じく、供物を捧げる。祈る、という行為さえも、“悪い心が出てこないように”。

どうしてバリに惹かれたのか、その理由はこのあたりにあるような気がしている。それは私にとって、とってもし新鮮な、それこそ目から鱗が落ちるような考え方だったのだ。

バランス、そして調和によって世の中が成り立っているということは、どちらかに偏ってはいけないということだ。その基本には相対立する二者の存在を、まず認識しなければならない。勧善懲悪は有りえない。善と悪の両方の存在を認めたくえて、どちらかを克服するとか、どちらかを強めるということではなくて、バランスのとれた状態、双方の釣り合っている状態を理想とする。自分の中に“悪”の部分、それは“弱い部分”だったり“どうしようもないもの”だったり、“嫌な部分”だったりするけれど、そういうものがあることを、そのまま、まるまる受け入れてしまうのだ。無理やり克服することなんかない。そのまま、受け入れて認めればいい。

なんだかとてもラクになった気がした。だけど…、

バリには神様もたくさんいるけれど、悪霊だってたくさんいるのだ。バリの人はそれを知っている。かげりのない明るさで誰でも簡単に受け入れてくれるように見えるけれど、そこだけしか見えないでいるとバリの本当の怖さはわからない。バリの虜になるあまり、自分のバランスを崩していることに気が付かないでいると、それとわからないくらい巧妙に、いつか罠にはまっている…。

だから、バリは本当は怖いところだ、と思う。バリ人はそれを知っている。私にはそこまで見えているだろうか。

バリの神様は依怙毘肩するように思う。バランスを崩していることに気がついていない人を、けっして受け入れてはくれないように見える。

バリに恋する人は多い。でも、恋するあまり盲目になりかけそうな時、私はいつもあの男の子の言葉を思い出していた。“だから神様に祈る、悪い心、出てこないように”そんなバリの人達のように、自分を見失わずにいつまでもバリと向き合っていきたいものだと、私は今思っている。バリの怖さをけして忘れないで…。

その他のニュース

■大型スーパー「RAMAYANA」堂々 OPEN !!

UBUD 在住の極通スタッフは要するに田舎モノで、また新しいスーパーができた、と聞くと喜んで見学に行ったりするのであります。今回デンパサールの中心街、JL.Diponegoro にオープンした「ラーマヤナ」は、なんと吹き抜けロビーがあってどえりゃあびっくりなのです。“街でいちばん大きくていちばん安い！”というコピーをかかげて、マタハリとティアラ・デワタの固定客を奪う勢いです。バリではまだめずらしい「ウインディーズ」や「ピザ・ハット」などのファースト・フードも出店しており、バリ人のエエとこのぼっちゃん、嬢ちゃんにぎわっています。余談ですが、先日、「はっはっはっ、俺は“マハーバラタ”に行ってきたぞう」と名前をまちがえて豪語していた日本人がいたのには大笑いでした。

■インドネシア・ルピア、かつてないほどの大暴落 !!

日本の皆さんも新聞などで読んでご存じだと思いますが、1998年1月中旬現在、1ドル＝ほぼ10,000Rp、1円＝な、な、なんと80～90Rp!!!! 以前、1円＝20Rp だったところと比べると、あろうことか4倍から5倍の急騰です。物価の上昇は今や笑ってすますどころではありません。輸入食材（乳製品、果物など）、紙製品、プラスチック製品、建築資材はもちろん、バイクや自動車のオイル、部品、タイヤに至るまで、3～5倍の値上がり！

その他、パサール価格でバリ・コピが1Kg = 8,000ルピアだったのが今20,000ルピアになったのをはじめ、卵、ココナツ・オイルなど、「そんなものドルと関係ないじゃん！」というものまでどんどん値上がっています。先日は、あるバリ人のご婦人が、「テンペまで値上がって、腹たつわ！」と怒っていました。いったいこの先、どうになってしまうのでしょうか…。物価が早く安定するのを願うばかりです。

■ルピアとドル建て

“弱い不安定な通貨ルピアを持つインドネシアの事情”

先日、とある日本人旅行者からこのような意見を聞いた。「私は昨年12月にバリを旅行した。しかしホテルの料金がドル建てになっているため、前回一泊15万ルピアだったホテルが、今回27万ルピアになってしまった。円は去年はRp23くらい、今はRp29から、Rp30にもなっているではないか。本当なら日本人はもっと安く旅行できていいはずだ。ドル建てなどという馬鹿なことをしているために、我々日本人は安く旅行が出来ない。ドル建て料金を取るによって、バリのホテルは必要以上に日本人からお金を取っている。日本人旅行者はこのことについて、もっと怒るべきである。」

皆さんはこの意見を聞いてどう思われるだろうか。

ホテルの料金は、安いホームステイ、ロスメンの類を除いて、確かにバリではドル建てとなっている。しかしこれは“もっと怒るべき”ことなのだろうか。

極通スタッフはこう考えます。バリのホテルの料金がドル建てなのは、ルピアが大変弱い通貨だからではないか…と。日本の皆様もよくご存じの通り、この夏タイバーツが暴落し、影響を受けたアジアの通貨は軒並み下落。インドネシアルピアも例にもれず、今年の8月頃よりあれよあれよと言う間に、ドルはRp2,500からRp4,000に届く勢い。円も一時Rp18まで落ち込んでいたのが、とうとうRp30を越すという、バブル以来の信じられない現象が起こっている。しかし、これがバリではどういうことになるかと言うと…。ドル高になれば当然輸入品の値段は上がる。連動して、食料品や嗜好品が軒並みこの2～3ヶ月で20%から30%値上げをしている。コカコーラ・ビール・バターやパンなど、旅行者相手のカフェやレストラン、ホテルにとっては毎日仕入れなければならないものが一斉に値上げに踏み切った。来年はガソリンが値上げするらしい。とは言えホテルの料金はツアーエージェントと契約書を取り交わしての関係上、一度決めたら簡単に値上げは出来ない。しかしこのように、いきなりの外部からの要素で通貨価値が一気に変わってしまうとしたらどういうことになるのか。正直これは困る。従業員給料に影響するかもしれないほどの一大事だ。し

うぶっなトク その24 ぼりり

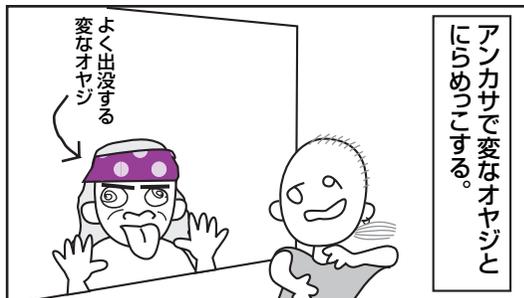
かもインドネシアの場合、こういうことはしばしば起こる。ルピアはそれほどまでに不安定な通貨なのだ。話は変わるが、インドネシアで働く外国人は全て、一年間に1,200ドルの税金を政府に納めなければならない。もしこれを今年のはじめに納めていたら300万ルピアで済んだ。しかしもしこれを1997年12月現在納めるとしたら、限りなく500万ルピアに近い額を要求される。税金さえも、ここではドル建てなのである。

ホテルの料金がドル建てになっているのは、“必要以上に利益を得るため”ではなくて、“弱い不安定な通貨ルピアを持つインドネシアの事情”とは言えないだろうか。“円”という側面からだけ見ていたら決して見えてこない、この国の事情を考えることは出来ないだろうか。

ちょうど同じ頃、極通スタッフの友人の一人が、年末のバリ旅行のための宿のブッキングについて連絡してきた。ルピアとドルの状況を説明した上で、ホテル代の支払分のドルを日本から持ってきた方が良く、とアドバイスしたところ、翌日次のようなFAXが届いた。“レートについては気にはしてはいましたが、まさかこれほどまでとは思っていませんでした。我々観光客は構わないのですが、地元の人々の生活に影を落としていないかと心配です。”

お金を使わず賢く旅行するには確かに大事なことでしょう。しかし、だからと言ってそのために、その国の事情を無視してもよい…ということにはならない筈だと、極通スタッフは考えます。それぞれ“円”の力にも言わせた傲慢な態度だとは言えないでしょうか。皆さんはこのことについて、どう考えますか？

(M / 1997.12. 記)

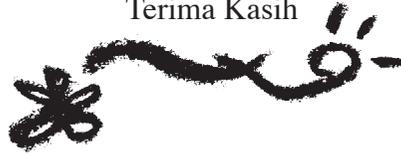


【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。お返し申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 堀 祐一 / 中田 恵

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：山根聰彦

極楽通信「UBUD」Vol. 24

1998年2月20日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1998 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101